

## 翻訳の楽しみ(89・3・17 東京分館)

市原 公祐(昭16・理甲)

私の今やっている仕事は、たまたま翻訳そのものなわけですが、いきさつから言いますと、仕事の関係で私は防衛庁にいたものだから、アメリカ人とはしょっちゅう話をしなければならぬいし、辞める頃はアメリカ人を逆に私が使つて、と言つたらオーバーですけれど、米人の技術屋さんや二百人位相手してくれて、私はプロジェクトコーディネーターだったんですが、その時はメモから何から全部英語です。そういう風にして英語はある程度使い慣れていたと言ふことができます。

もう一つは、自衛隊を辞めて会社に入って、会社ではダメ人間だったものだから、たちまち窓際族になったんですが、窓際族を何か利用出来ないかと会社が考へて、外国から折角引合の手紙が来ているのにほつておいて何も返事もしないのは、商機を逸しているかもしれない。皆、分からないからだと言ふことで海外プロジェクトチームを作つて、それをやらされた。その内に

ちやんとポツポツ商売が出来る様になって、私が辞める頃にはかなりになりましたが、当時は国内産業では、輸出は売上げの3%、千に三つ注文が入るといふ程度だったんですが、私が会社を卒業した後で、なんと会社の売上の30%を占める様になっておりました。

定年で会社を辞めたらたちまち失業になる、まだ子供が学校に行っていたもので何かやらなければと思い、新聞広告を見ていたら、フリーランサー、翻訳家求むと書いてあって、それではとそこへ行きやらしてもらうことになる、まずトライヤルと言ひまして、少しずつ注文を出してテストをする訳です。この人ならいいということになるとだんだん注文がくるし、連続して仕事が来る様になります。

そういう風にしてもう10年この翻訳をやつて来ました。ただしその失業を始めた直後に防衛技術協会という技術研究本部のOB達のグループにさそわれて、その手伝もするので本職の方は防衛技術協会の働きばちなんですけれども、サイドワークの方が翻訳です。そういうのがこの話のイントロダクションですね。

どんなものをやっているかと言うと、大体一般に技術翻訳と言われる物です。私は電気屋だから電気しか出来ないという様な人は技術翻訳は落第です。

ですから原子力・重化学工業・航空宇宙産業・土木建築産業・水利事業・海洋開発・輸送・例えば地下鉄だとか、環境問題・農業・生化学、つまりバイオテクノロジー・情報産業、この中に



下  
 ○  
 本誌は、読者のために、  
 翻訳出版の分野で、  
 最新の情報を提供し、  
 読者の知識を深め、  
 読者の生活を豊かに  
 することを目的として  
 創刊された。本誌は、  
 読者のために、最新の  
 情報を提供し、読者の  
 知識を深め、読者の  
 生活を豊かにすること  
 を目的として創刊され  
 た。本誌は、読者のた  
 めに、最新の情報を提  
 供し、読者の知識を  
 深め、読者の生活を  
 豊かにすることを目的  
 として創刊された。

（東京）  
 本誌は、読者のために、最新の情報を提供し、読者の知識を深め、読者の生活を豊かにすることを目的として創刊された。本誌は、読者のために、最新の情報を提供し、読者の知識を深め、読者の生活を豊かにすることを目的として創刊された。

眞實と良質



（東京）  
 本誌は、読者のために、最新の情報を提供し、読者の知識を深め、読者の生活を豊かにすることを目的として創刊された。本誌は、読者のために、最新の情報を提供し、読者の知識を深め、読者の生活を豊かにすることを目的として創刊された。

過当競争で「質」の心配

（東京）  
 本誌は、読者のために、最新の情報を提供し、読者の知識を深め、読者の生活を豊かにすることを目的として創刊された。本誌は、読者のために、最新の情報を提供し、読者の知識を深め、読者の生活を豊かにすることを目的として創刊された。

面白いのがあります。玩具、玩具と言うのは今電子玩具でしょう、だから何万と売ったのが壊れたらもうどうにもならないから、厳しい規格を定めて製品を作る時には、MIL規格（世界中で一番厳しいと言われている米軍規格）の物を使えと書いてあります。スゴロクもありました。スゴロクも非常に面白かったです。要するに今は昔の一ツの専門分野ではだめであって、これらの中味を見ますと一分野だけというのは一ツもありません。色々な専門分野が集まってそれを総合して必要な関係分野を集めて、何かの目的を達成すると、そういうことが中心になっております。

形式・形式にはどんなものがあるか。先ず法令があります。学術論文・特許出願の明細書・ロビーストやコンサルタントからの報告

書・著書・雑誌の記事・財務年度報告・製品のPR文書・引き合い状に付属している仕様書・製品の使用説明書・演説の内容・プラント建設の為の機材購入一般仕様書・書簡など非常に巾が広いです。誰れから注文してもらったかという事は公表してはいけませんが、一般的にいえば官民各部門の担当者から個人企業に至る非常に広い範囲です。

それから翻訳作業はどの様に行なわれるかと言いますと、翻訳会社が受注活動によって、お客から集めた原稿の翻訳を翻訳者に発注します。発注の際は期限・納期とそれから翻訳の範囲、どこからどこ迄やってくれ、と、時には仕上りの書式・用紙等色々指定される場合があります。翻訳作業を終わってもそれだけでは完成しないで、翻訳者から集まった原稿を翻訳会社が加除訂正、誤訳や表現を修正しまして、お客の指定する仕上り、昔はタイプで仕上げ今はワープロが普通でレイアウトなども仕上げます。加除訂正というのは、翻訳というものは翻訳者がいくら頑張っても百点の翻訳は出来ない。間違ったりします。出来ない理由は期限があるから念を入れてそこだけに時間を掛けることが出来ないのです。全部を期限までに仕上げなくてはいけないので、そういうこともあるし、思い違いで間違った解釈をすることがあります。そういうのは客観的に見るとおかしいとすぐ分かるのですが、それを翻訳会社が原稿をもらって全部なおすわけです。(別紙に例があります。)そういう風にしないと読める様な翻訳は出来ないわけです。ですから翻訳会社も非常にマンパワーをかけております。だから売値は翻訳者に渡す翻訳料の二倍位でお客さ

わかります。

この二つのことをあわせて考えると、生徒の補聴器が仮に教師から 50cm の距離で適切な音圧が得られるようにフィッティングされているとすれば、教師から 3m 離れると補聴器の動作音圧は、生徒の域値以下になります。

これでは、教師の発声超音や音声情報を生徒に伝達することはできません。教師の発声超音や音声情報を適切な補聴器の動作音圧で生徒の耳に到達させるためには、個人補聴器では不十分であり、何らかの手段を講ずる必要があります。

こうした中で、個人補聴器が、あらゆる生活環境にも有効に利用できるように考案されたものが補聴システムであります。  
*Auditory Assisted System*

現在、一般に使用されている補聴システムは、大きく分けて二つあります。そのひとつはループシステムであり、他のひとつは F.M. システムであります。

この両者には、発声符号の伝はん方式の違いにより、<sup>convenience</sup> 使い勝手の上で互いに長所や欠長があります。これ

(原稿用紙)

## 1 翻訳の訂正の例 (原文)

sound level of the hearing aid will become below the pupil's <sup>audible</sup>/~~audible~~ threshold <sup>threshold of audibility of that pupil</sup> when the teacher is <sup>located</sup> 3 meters <sup>away</sup> apart from the pupil.

This will prevent the sound or <sup>verbal</sup>/~~verbal~~ information presented by the teacher from reaching the pupil. <sup>in practice</sup> to <sup>deliver</sup>/~~deliver~~ intended sound or <sup>verbal</sup>/~~verbal~~ information to a pupil at an optimum audible level <sup>from</sup>/~~from~~ his hearing aid. <sup>Personal individual</sup> ~~Personal individual~~ hearing aids alone will not be sufficient and some other measures must be taken to solve this problem.

Considering all these factors, we have designed an auditory <sup>assisted</sup>/~~assisted~~ system which will <sup>permit</sup>/~~permit~~ effective use of <sup>individual</sup>/~~individual~~ hearing aids in <sup>any</sup>/~~any~~ environment of <sup>most</sup>/~~most~~ living ordinary life.

Practically, there are <sup>broadly</sup>/~~broadly~~ two types of auditory <sup>assisted</sup>/~~assisted~~ system in use. <sup>General</sup>/~~General~~ <sup>used</sup>/~~used~~. One is the magnetic loop system and the other <sup>wireless</sup>/~~wireless~~ the FM system.

Both systems have <sup>their</sup>/~~their~~ <sup>specific</sup>/~~specific~~ advantages and short-comings in <sup>usage</sup>/~~usage~~ due to <sup>different</sup>/~~different~~ sound transmission <sup>media</sup>/~~media~~ and <sup>convenience</sup>/~~convenience~~. However, <sup>one</sup>/~~one~~ <sup>system</sup>/~~system~~ is better. Any way, both systems have an <sup>advantage</sup>/~~advantage~~ <sup>over</sup>/~~over~~ the other.

## 2 翻訳の訂正の例 (訂正文)

んに売っております。  
翻訳には何が必要か。  
これは正確なことが  
必要です。原文に入っ  
てる言葉をはぶいたり、  
原文の意味を間違っ  
てはならない、これは非  
常に要求されます。言  
葉をばぶくのは一番困  
ります。それから迅速  
さ、これは納期が非常  
に迫られます。一刻も  
早くお客さんはその情  
報をほしがっておりま  
す。それから要件とし  
てお客さんの世界で通

用する言葉遣いで書かなくてはいけない。それには各種専門用語の辞典が欠かせません。同じ言葉でも、例えばリクワイアメントなんてのは、水道屋さんでは必ず要件としなくてはならない。

ところがそうでない我々電子屋なんかは、技術的要求事項とか、要求だとか、時には仕様だとか規定だとかと、訳した方が正しい場合があります。

それからどんな風に翻訳すべきか、お客の身になって翻訳しないと、どこのを本当に知りたいのか、素人が読んでも分る様に翻訳しないと、これは直訳では日本語にならないということです。例えば（別プリント）の新聞記事がありますね、三回にわたって新聞に出た「翻訳出版は今」というものの「下」に当るんですけど。……「勇敢な行為が使える当の関心が全く利己的なものでもありうる点に注意せよ」。……これでは何だか分からないですね。

月刊の翻訳の世界という雑誌がありまして、そこにたまたま上智大学の先生が試訳だがこれに本当の日本語にするのは、「勇氣のある行為が、まったく自分本位の利害に奉仕する場合もあることに注目しよう」という意味だそうです。原文は分からないけれど、こういう風に日本語にしないと直訳ではまったくだめです。それから原著者の言いたい事をあますことなく伝える様になさいと、これは飛ばしてはいけません。非常にニュアンスが豊かですので、言いたいことを言っていますので、そこがうまく伝わる様にやってやらなくてははいけません。

それから翻訳の難しさ。何が一番難しいかという日本語です。最初の頃はとにかく英語の意

味は分かるのだが、その日本語の表現法がなかなか出てこない。何故自分はこんなに国語を知らないのだろうか、と、いう位出てこない。やってる内にだんだん来てうまく行く様になります。それから難しきは言語学的構造と言語文化の相違、これは言語学の話ですけれど、言語文化というのは文化その物が違うので非常に分からんことがあります。何を言おうとしているのかからないことがあります。それから新しい用語とか用法がどんどん出て来ます。それで一番元の言葉ですね、専門用語辞典にもつてないですから、一番オリジナルな——ウェブスタ辞典の言葉を一生懸命見て想像してこんな事かなあと、技術的に想像してどうもこんな事らしいと、それを日本語としてどういう風に表わそうかとかこういうのが難しい所です。

次は翻訳をしてえられる功德です。

翻訳の功德、これは日本語の表現への関心、とにかく日本語に関心が高まります。それで今使われている生きてる日本語を学ぶには、一番いいのはラジオ・テレビそういう物です。なんとなくテレビを見ながら、パツパツとあんな言葉があったんだと、行き当たりばったりですが、そういう態度がだんだんと自然に出来てきた。それから又翻訳していいのは、今までまったく知らなかった事、一般の情報から得られない世界中の風土や習慣を知り、今迄なんとなく不思議だなあと思っていた疑問が解決する事もあります。

ドイツⅡこれはD I N規格というのを翻訳したことがあります。D I N規格、これはその中の



日本で言えば、電気用品取締り法ですね、そこで電熱器かなんかの所だったと思いますが、ドイツでは家畜小屋に電熱器を使っている習慣があるようです。電熱器を上から下に向けて使って、何メートル離して馬草に引火しない様にしなさいと書いてあります。ドイツの規格の翻訳で不思議だと思っていた疑問が解決したことがあります。例えば二〇〇ボルト送電という言葉が今よくはやっています、一〇〇ボルトと二〇〇ボルトは触った時の大変なショックの違いがあります。馬は40ボルトで死ぬことになっています。人間は一〇〇ボルト位ではまず死なない、二〇〇ボルトだと非常にきつい感電になります。どうなっているのだろうと思つたら、三線配線になっていて、真中の線がアースで外側の二つの片方は(+)-一〇〇ボルトで片方は(-)-一〇〇ボルトとなっています。私電気屋なのに翻訳をする迄まったく知らなかったのです。それも知らないのは大学出の僕らの電子工業会の委員会のメンバー自身がそうでした。アメリカと日本は同じですから、例えばアース側と生きてる側があつて、(+)-100と0なんです、アース側は黒で、生きてる側は赤とか白なんです。ところがヨーロッパに行きますとアースがみどりなんです。何故みどりかと、皆も分からなかったのですが、要するに3線方式になっているということが分かりました。

ソ連これは鉄道だったんですが、国際鉄道会議があつて、ソ連が当時の担当国になって、皆んなにアンケートを出しているわけです。お国では、貨車の配車計画はどの様になっていますか、ソ連では一回外に、ヨーロッパに出すと、どこの国で何日通関になるか分からないと、何日かか

ると貨車が戻って来るか分からないという問題が出てきました。ソ連で面白かったのは、ソ連で電気の見本市があるので出品しなさいというのがあって、例えばこんな物をと書いてあるのが、ものすごく大変な最先端技術の物だけ要求しているのです。それでやっぱりソ連は先端技術を知りがっているのだなあということがよく分かりました。

ニュージランドⅡこれは鉄道です。ニュージランドは日本と同じ位の広さですけれども、人口は十分の一位ですか、もつと低いかな……：鉄道を引くといつても、複線にして国中に引きめぐらすという訳にはいかず、ですから単線になつてゐる様です。単線を日本に頼んで、要するに電子制御してくれという注文だったので。その時に非常に山国であるので、一直線の部分が一キロ以上あるという場所は一つもないと書いてありました。ちなみに北海道に行きますと、自動車道路が一直線20キロ30キロ以上という所はないですね。アメリカに行けば160キロ位ありますね。その辺が違うのだなあと思います。

ザイルⅡこれは総理大臣みたいな人の演説だったんですが、とにかく食糧問題を解決しなくてはならないと言う、檄を飛ばす様な演説だったんですが、その中味が非常に真面目で具体的だったんです。今の大臣の位にある人を、折角この人だったら地方の農業の頭にした方がいいと、ただし給料が下るのは困るから大臣のままの給料でと書いてありまして、米がやっぱり最終的な目標だった。トウモロコシだとか、その意気込みに感心しました。

イギリスⅡこれはバイオが非常に盛んですね。バイオの資料をかなり翻訳したんです。向うのバイオは、例えば自然に解けてしまふ、腐って土に戻る様なプラスチックの袋、それに肥料を入れて麦畑に冬の間に埋めておくと春になって温度が高くなると、その袋が破れて自然に肥料がいき渡ってうまく行くというアイデアでした。

カナダⅡこれは航空産業では非常に進んでおります。と、いうのはカナダは非常に広くて、人口は少なくともが過疎と過密がまばらに分布しているので、出来るだけ地方に主要産業を移して、そこを産業の中心にして人口をまんべんなくばらまく努力をしている様です。そこで航空機能部品とか航空技術をやっているのですが、最近アメリカとカナダが一番新しいシステムで競争して、政治的にはアメリカが勝ったんだけど、圧伏したんですカナダを、実際は技術的にはカナダが進んでいる。衛星のメンテナンシステムなんです。衛星のメンテナンシステムは、技術的にはスペースシャトルのもっと先です。そこに乗っているのはみんなロボットで、衛星を渡り歩いてメンテナンスをやる、そんなものです。これはカナダの方がはるかに技術が進んでおります。カナダの方が主導権を取ろうとしたんですが、アメリカが面子に掛けてもカナダを圧伏してアメリカになった様です。

中国Ⅱこれも航空が非常に盛んです。韓国もそうです。韓国は二千年代以後は宇宙産業を目指しております。中国、これも例えば有名なアメリカのマクドネルダクダスの部品を、機能部品と

いえるかどうか分かりませんが、ドアですね、いろんなドア、要するに板金物を精密加工するということは、技術の中では非常に高いレベルを必要とします。電子レンジが日本とアメリカでは普通に使われていますし、ヨーロッパでも使われているのですが、中国や韓国では作ろうと思っても出来ない。金型の精度が悪い、金型が悪いとドアがピシッととはまらない。あれは使っている間ピシッととはまっていなくて電波がもれて人間があぶないのです。ドアを作るといっても簡単にドアかという訳にはいかない。航空機のドアは気密で非常に大きいですから、大きい物の寸法、誤差とか変形とかそういう物の要求が満たされないとドアといってもばかには出来ない。そういう物は世界の飛行機の三割から四割中国から供給されています。

フィンランドⅡこれは水道の関係で、フィンランドはきれいで湖があつて、夢の様な国だと思つていたらそうではない。例えば必要な時に雨が降ってくれない、だから夏頃植物が繁茂する頃雨が少なく春に多い様です。それに地形が非常に平らなものですから雨期の洪水による汚水問題が非常に問題になっている様です。

米国Ⅱ先程オモチャの話もありましたが、水道でいいますと、米国ではプレシヤスウェージ、圧力下水というものがあつて、圧力とは何だろう。日本では下水と言えば上から下へ流すが、アメリカ当りでは下から上へ下水をポンプで押し上げているのです。これは何だろうかと思つたら、湖あたりに別荘がいっぱいあるらしい、何千軒という程度、それもあちらこちらに沢山ある

みたいです。下水にグリースが詰ると書いてあって、グリースで何だろうと思っていたら、料理をした時に出てくる肉の脂肪が詰るのです。なんで圧力下水かというと、湖が低い所にあるのですが、処理池は湖の側はみんな別荘地ですから作れない訳で、山の中腹辺りに作ってあって、プレシアスウェージ、圧力下水、何だろうと思つたらその様に下水を上にあげてるのです。そういう面白いことがいくらかでも出てくるわけです。ですから翻訳の功德としては、そういう中味が面白いという事は確かにあります。組織の歯車として働いた頃は、私は役所ですから、役所は延々として仕事は続いているのいつどこに区切りがあるのか分からない。会社の方がよっぽどいい、要するに決算期が有りますから。役所は何となく自然に流れていて、皆でおみこしをかっている内に軍艦が出来たり、飛行機が出来たりする様ですけども、一ツの仕事が済んで、ああ良かったとか、ヤツタネという気持がまったくない。

ところが翻訳では一ツ一ツが中味も面白いし、達成感とか充足感がえられる。これが楽しみという今日の翻訳のメインテーマになるわけです。それから翻訳家の位置付けは、税法上は翻訳者は自由業です。文筆業をやっている人と同じです。翻訳者の標準的報酬は、四〇〇字詰原稿用紙一枚が英和で千円位で、和英の場合は千二百円、これは標準のタイプ用紙一枚という程度なんです。直間経費を上乗せして顧客への売値はその二倍位になります。ダンピング価格で業界に乗りこんだ人もいますが、製品がお粗末でそういうのはすぐ消えて無くなります。英語以外の外

国語は需要と供給の法則に従ってわり高になります。

むすび Ⅱどんな風に私が翻訳を楽しんでいるかというのは大体お分かりになって戴いたと思いますが、その実態はものすごく苦勞の連続です。時間に縛られ、ギーギー言いながらやらなければなりません。山登りと同じだと思えます。非常に長丁場で、一週間程は釘付けになって本当に首ったけになって、ぎりぎりやらなければ終らない、悪戦苦闘の連続です。しかしそういう苦勞をするしがいがあるとのお遊びです。それがやめられないというのが私の気持な訳です。

これは私だけの意見ですが、私は熟年という言葉はきらいなんです。熟年は熟したら腐るだけというので、だから私は未熟、未熟、一番未熟さを味わえるのは翻訳なんです。翻訳をどれだけやっても完璧ということとはまったくない。それで一生懸命取り組むのは非常にボケ追放にもなるし、増々みきががからないと一人前にならない訳です。私は本当にプロの翻訳家等と言われる腕前には達してないし、英検一級を受けたらたちまち落第するでしょう。でもとにかく翻訳職人として出来るだけ立派になろうと一生懸命頑張っているのです。